

2023年1月号

ハノイ日本人学校 学校便り

# こころの道

令和5年1月5日

## Nhân hậu Thông minh Khỏe mạnh



やさしく

ニャンハウ

かしこく

トンミン

たくましく

ホーエマイン



校長 明石清二

今月の生活目標 ○小学部 自分から進んで行動しよう ○中学部 一日一善、人のために進んで行動しよう  
学習目標 ○小中学部 意見を伝え合い、考えを広め、深めよう～自主的・自発的な学習態度を身に付ける～

### 明けましておめでとうございます

今年卯年。ちまたの情報をまとめますと、「芽を出した植物が成長して茎や葉が伸びる時期。目に見えて大きく成長する時期。」「ウサギは跳びはねることから、飛躍の年。たくさんの子を生むことから豊穡、子孫繁栄の象徴。」などの記載が目に入りました。

4月から登校できるようになった本年度は、正に大きな飛躍の一年でもあります。第3学期は年の始まりであると共に、学校ではまとめの時期でもあります。大きく飛躍した年度をしっかりとまとめさせていただきます。

第3学期も所狭しと自由に飛び跳ねることで自分の可能性を見つけ出させると共に、飛び跳ねた後の着地点をしっかりと見極める適性も身に付けさせたいと考えています。

今年もしっかりと子育てをしてまいります。御協力をよろしくお願いいたします。

### ウサギの思い出 ～二話～

#### 「第一話 ～勉強するウサギ～」

その学校では、ウサギを飼っていました。飼育委員会があり、子供たちが一生懸命にウサギの世話をし、休み時間には小屋から出して校庭で遊ばせていました。

6年生を担任していたある日のこと。「センセイ、授業中ウサギを教室に連れて行っていいですか。自分たちで面倒をみます。みんなで相談して決めました。」と子供たちが話しかけてきました。

私は動物が大好きですので、諸手を挙げて大賛成。その日からウサギとの共同生活が始まりました。

授業中は、子供が広げた算数科の教科書の上に座っていたり、子供のランドセルをかじったりしていました。時にはおしっこもしましたが、数人の子が教室の片隅に用意してあるトイレトペーパーを使って始末し、消毒をして何事もなかったかのように授業に戻っていました。

#### 「第二話 ～犯人～」

校長をしていた学校にもウサギがいました。年をとったウサギだけでしたので、純白で耳がとても長いニホンウサギを二羽増やしました。人懐こく、いつまでも膝の上に座っているウサギです。

ある日、大雨の被害がありウサギ小屋が水没。ウサギたちは小屋の中にある、幅が狭い棚の上に避難していました。教員数人が膝まで水につかりながらウサギを救出。水が引くまでの数日間、校長室隣の空き部屋で生活していました。

その後、ある日、警察から電話があり「署の前に置き手紙が添えられたウサギが捨てられています。学校で引き取ってもらえませんか。」とのこと。「頭数を増やすわけにはいきませんから、雌ならいいですよ。」「大丈夫です。調べました、雌です。」パトカーでウサギが運ばれてきました。

数か月すると、なんとあの純白のウサギが子を生んでいるではありませんか。「えっ。どういうこと？」

そうなんです。犯人は、取り調べを受けパトカーで運ばれてきたあのウサギだった

のです。生まれてきた子供たちは、保護者の皆さんが里親になってくださいました。



2ページ目は、「関西帰国生親の会かけはし」（1984年結成の帰国生の親によるボランティアグループ）の御依頼を受け、『かけはし会報 Vol. 45』（2021年春夏号）に寄稿した松下事務局長の随想（改訂版）です。教員ではない視点からの執筆には、学校運営の新たなヒントがちりばめられていると共に、事務局長の子供に対する温かさが感じられます。保護者の皆さまにも御紹介させていただきます。

# 明日も元気で会おうね！！

ハノイ日本人学校 事務局長 松下和宏  
民間企業に勤務し、12年の海外駐在を経て現職

「おはよう～！」スクールバスが到着し始め、元気に躍り出てくる子、寝ぼけ眼でフラフラと降りてくる子、その一人一人と挨拶を交わすことから一日が始まります。今はコロナ対策として子供たちの手に消毒液をかける僅かな間の会話で、その子たちとの距離がグッと縮まっているように思います。

本校は在ベトナム日本国大使館始め商工会等日本人社会に多大な御尽力をいただき1996年5月に設立、本年開校25周年を迎えます。児童生徒数は2019年末に500名に迫り、昨年は大きく減ったものの今春400名超に回復、日越間の経済を始めとする交流の高まりを背景に、今後も大きく増えていくと思われま



校訓は“やさしく かしく たくましく”です。校歌『こころの道』は、「やさしく かしく たくましく」を心の糧に、日越両国や世界を繋ぎ希望と夢に溢れた未来に進もう」旨、謳い上げています。そして学校全体が明るさと優しさに包まれ、学校に来るのが楽しい、そんな“場”で「夢と誇りを持った子供」を育てることを本校は目指しています。

各教室での朝の会で校内は一時の静寂、そして授業。音楽室から歌声、運動場からは体操のかけ声、プールでの歓声、教室からは「ハイ！」と自信に満ち溢れた返事が聞こえてきます。よし、今日もみんな元気だ！小学部1年生の『手紙を書く』授業で先生でもない私に手紙を書いてくれた子供たち。私を“挨拶の先生”と思っているのかな。嬉しい限りです。ハノイは深刻な大気汚染で外で遊べない日も多くあります。空気が良くなり運動場が使えると知った時、子供たちの顔はパッと晴れるのです。良かったねえ。中学部1年生の調理実習で私にも“鯖の煮付け”のお裾分け。美味しい！日本の味だ。ありがとう！！

子供たちにとって私は「何してる人？」なのです。そう、電球が切れた時やトイレが詰まった時に直してくれる人です。ベトナム人スタッフと予算管理、入国・労働許可申請、バス運営など学校経営もしてるんですよ。私たちは“教員免許が無くてもできる”ことを務め、教員にはより質の高い教育に専念いただきたいのです。とはいえ教員と事務職員の職務の線引きは難しく、休む間もなく子供たちと向き合う中、飾り付けや敷布洗濯など、それって教員の仕事？と思えることにも彼らは一生懸命です。教員とは“奇人”なのです。

学校は企業人時代の私が信じていた常識が通用しない所でもあります。校長や教員と私はよく意見が分かれます。それでも「新鮮で驚かされる」私は徐々に受け入れられ（てるのかな？）、私自身も教育現場の実状を知るようになって、意見・提案の前に何故そうなのかを理解する重要性を感じています。60歳を超えても“日々新た”、なお勉強です。

毎日のように保護者が来校されることも驚きの一つです。Teachers' Day イベント、節目時の記念品などPTAが積極的に進めてくれます。正月にはお節料理が児童生徒・教員に振る舞われました。理事会からも様々な指針・御支援をいただきます。昨年はコロナで教職員が入国できない・学校が開けない状況下で学校を支えていただきました。多くの方々の御支援があって学校は存在しています。皆さん、ありがとうございます。

教員は子供たちの関心が授業に向くよう、学校でのあらゆる経験が子供たちの健やかな成長に繋がるよう、無意識に“演じて”います。子供たちはそういう教員に安心して心を寄せてくれます。学校はテーマパーク、児童生徒はゲスト、教職員はキャストと私は思うようになりました。そう、学校は明るさと優しさに包まれ、来るのが楽しい所なのです。



スクールバスがエンジンをかけ始めました。いよいよ下校時間、テーマパーク“ハノイ日本人学校”閉園の時です。一日の充実感と家路に着く安堵感に満ちたゲストを、そのゲストの笑顔と成長に幸せとやりがいを感じるキャストが「さようなら～」と今日も手を振って見送るのです。

今日も楽しかったね、ありがとう！ 明日も元気で会おうね！！